

成人後に再開した母は  
底辺売女になっていました……



僕には母親がない。  
僕が幼い頃に父と離婚し  
家を出てしまったから。

母さんは役者になるという夢を  
諦められなかったのだそうだ。  
夢見がちな彼女には母親を演じる器量が  
なかったんだと父は皮肉を言っていた。  
役者志望の女にはワンナイト以上には関わるなとも。  
父はあまり母さんのことをよく思っていないようだ。

でも僕は今でも覚えてる。  
母さんが優しく僕を抱きしめてくれたことを。  
母さんから漂う優しい匂いを。  
いなくなってしまうけど確かに母さんは  
僕のことを愛してくれていた。  
僕はそう信じている。

だから成人を迎えた僕は思ったんだ。  
立派になった姿を母さんにも見てほしいって。





その考えに父は大反対した。  
もう彼女は『母親』じゃない。  
会っても後悔するだけだって。

でも僕は納得できなかった。  
どんな結果になるにせよ  
一度は言葉をかわしたいと思ったんだ。  
だから僕は流る父から  
半ば無理やり居場所を聞き出した。

父さんの言う『後悔』が  
どんな酷いものかも知らずに……

「ここが母さんがいる町か……」

第一印象は寂れた場所。  
まだ昼だと言うのに人通りは少なく  
開いてる店もほとんどない。  
美人で優雅な母さんの記憶とは  
いまいち合致しない町並みに  
僕は一抹の不安を覚えた。

「いや……どこに住んでようと  
母さんは母さんだ」

僕は自分に言い聞かせるようにつぶやき  
母さんの住んでいるというアパートを目指す。

その女性はアパートの前で  
手持ち無沙汰といった様子で立っていた。  
記憶の姿より少し老けたその見た目は  
時の流れを感じさせる。

でも間違いない。  
彼女が僕の母さんだ。



「あつ……そこのお兄さん。  
もしかして私に  
会いに来てくれたの？」

母は僕の存在に気づいてくれた。  
その反応を見るに僕が来ることは  
事前に知らされていたのかもしれない。

緊張と期待で鼓動が早くなる。  
最初はなんと声をかけようか。  
久しぶり？それとも会いたかった？  
いや、そもそも彼女は  
僕を受け入れてくれるだろうか？  
いろんな思いが交錯し  
僕は返事が遅れてしまう。



でもそんな思いは  
次の母の行動で吹き飛んでしまった。

「一発どうかしら？  
お兄さん初めての方みたいだし  
半額でサービスしちゃうわよ？」



母はなんの躊躇いもなく  
僕の前で服をはだけた。  
最低限の下着はつけていたものの  
乳輪や陰毛はハミ出ており  
その体には自分で書いたであろう  
露骨な文字が並んでいる。

「どうしたの黙っちゃって。  
もしかして緊張してる?」

「大丈夫よ。  
おばさん経験豊富だから  
いろいろ教えてあげる」

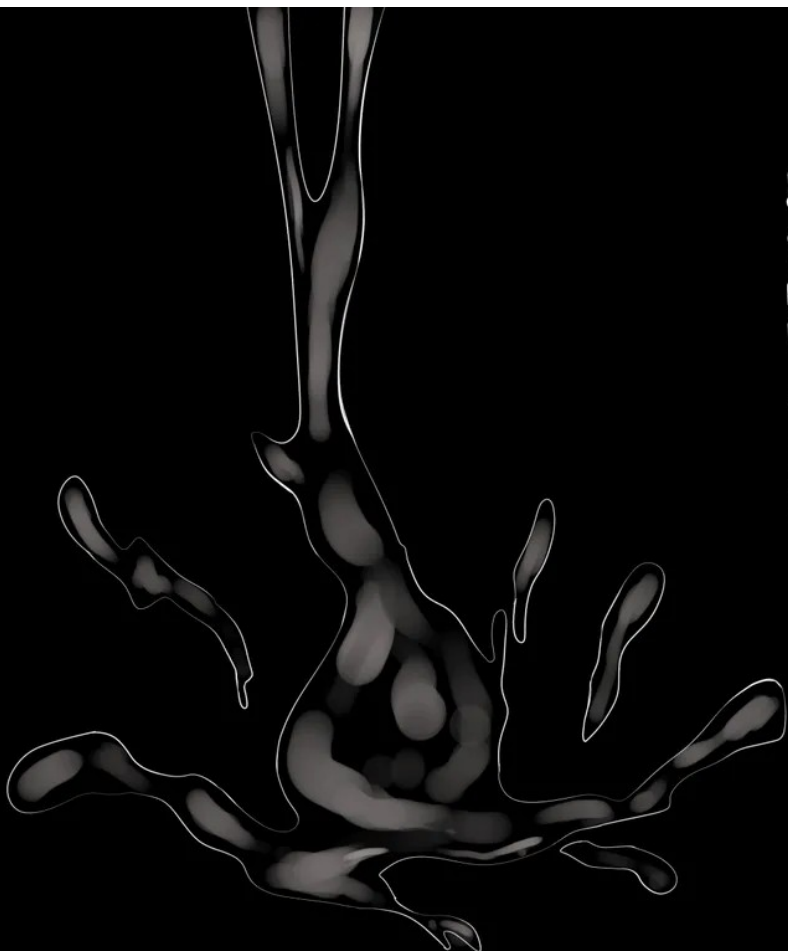
「ほら、早くおばさんと  
ハメハメしましょ♥  
お兄さんのオチ○チン  
ねじ込んでほしいなあ」

無料  
1回1000円  
中出し  
1日1回  
5000円  
1日1回  
お兄さん

母さんは下品な言葉を使って  
僕を誘ってくる。  
彼女がいまなにをして稼いでいるのか  
徐々に頭が理解し始める。  
それと同時に耐えられないほどの  
吐き気が襲ってきた。

『おえええええええええ』

僕は母さんの元から  
逃げるように走り去った。  
途中でついに耐えきれなくなり  
路上に嘔吐してしまう。



あんなの嘘だ。  
あの優しくていい匂いのした母さんが  
こんな場末で汚れたところを歩いて……

「違う……きっと何かの間違いだ。  
あの人が母さんだっただはずがない」

冷静に考えればさっきの人が  
母さんだと断定するのは早かった。  
単に母さんにそっくりな女性が  
母さんの住むアパートの近くにいたというだけだ。

「そっか……  
部屋に行けばきっと本物の母さんが  
待っていてるはずだ」

自分でも屁理屈なのはわかっている。  
でもどうしても認めたくなくて  
僕は母さんのアパートへ引き返した。

でもそこで待っていたのは  
絶望的な光景だった。

「じゃあ言ったとおりに  
やるんだぞ。  
手え抜くなよ?」

「はい……もちろんです。  
では失礼いたしますね」

部屋は鍵がかけられておらず  
それどころか半開きになっていた。  
その隙間から見えたのは  
客を迎え、まさにいまから  
奉仕を始める直前の  
母さんの姿だった。



止める暇などなかった。  
母さんはおっさんの汚いお尻に  
顔をうずめながらモノをしごき始めた。

「うはっ……すごっw  
まじで洗ってないケツ穴に  
舌入れてるよw」

「うほおおっw  
気持ちいいいいw」

その動作は手慣れていて  
一切の躊躇いがない。  
もう何度もこんなことをしているんだ。  
それが嫌でもわかってしまう。



「ふふっ、いっぱいでしたよ。  
とても元気ですねお客様」

「追加料金になりますけど  
この調子で本番いかがですか？」

「ふひひっ、払ってやってもいいぞ？  
ただし雌豚になって  
はしたなくおねだりしろよなっ！」

「はい……  
やります」

これから母さんは  
この知らない男と交わるんだ。  
そう思うと再び  
吐き気がこみ上げてくる。  
この先の行為なんて  
絶対に見たくないのに……  
なのに僕はその場を動けなかった。



「どうかこの薄汚い雌豚に  
ご主人様の特におち○ポ  
ねじ込んでください♥」

「ふひっ。  
きつつい演技だなW  
あゝあ、これがおばさんじゃなくて  
橋本環○ちゃんだったらよかったのに」

「……………ごめんなさいね。  
その分精一杯  
奉仕するから……………」

「当たり前だろ！  
つてか演技やめるなよ  
雌豚め！」

「はっ……………はっっ！」



「ほらっ！  
鳴けよメス豚あ！」

「ああんっ♡  
イクうううう♡」

「違うだろっ！  
豚なら鳴き声は  
ブヒーだろうが！」

「ぶひっ!」  
「ぶひひひひひ!!」

ブル

母さんはこんな演技をするために僕を捨てたの……？

どうして……？  
僕は汚らわしく交わる  
二人を見ながら  
届かない疑問を投げる。

こんなことするくらいなら  
『母親』をやったほうが  
よっぽど幸せじゃないか。

「ほら、種付けして  
やっつんだぞ。  
お礼はどうした雌豚？」

「はい……  
ありがとうございます。  
ご主人さま……」

ドブドブ

「だから人の言葉を  
しゃべるなって  
いつてるだろ！」

「ふひふひ……  
ふひふひふひ……」

「ふひひw  
惨めな豚だなw」

こんなことになる前に  
戻ってきてくれたらよかったのに……



その後も二人の交尾は続いた。  
母さんは言われるがままに  
屈辱的な鳴き声を上げ  
客に媚び続けた。

おら  
鳴いてええ!!

ブレイ

ギニエええ!!

ブレイ!!

ブレイ

ブレイ

ブレイ

ブレイ

ブレイ

ブレイ

もど  
やる気さあ!!

ブレイ  
ブレイ

たった数千円のために  
ここまでするんだ。  
母さんはそれ程までに  
落ちぶれてしまったんだ……

男は性欲を発散させると  
さっさと帰っていった。  
少し遅れて母さんの股間から  
男の汚れた液体がこぼれてくる。

最悪の光景だった。  
こんなものを見るくらいなら  
来なければよかった……

父さんが反対した理由がようやくわかった。  
彼女は僕が会うべき『母さん』じゃない。  
僕はいますぐこの場から立ち去るべきなんだ。



でも運命は僕たち親子を  
離してはくれなかった。  
母さんが僕の存在に気づいてしまったんだ。

「あれ？  
さっきのお兄さんじゃない。  
やっぱりやりたくなんだんでしょ」

「シャワー浴びてくるから  
ちよっと待っててね」

このとき僕は有無を言わず  
帰ってればよかったんだ。  
なのに僕はそうしなかった。



あれよあれよという間に  
僕は部屋に招き入れられ  
母さんに抱きしめられていた。

「うふふ。お兄さん鼓動が  
すごく早いよ」

「大丈夫。  
おばさん相手なんだから  
練習だと思えばいいのよ」

子供の時のそれとは違う。  
僕は男として母と素肌を重ねている……

ドクン

ドクン

むにゅ



母さんの舌が僕の口の中に入ってくる。  
ついさっき男の肛門をしゃぶったばかりの  
汚れた舌が……

「んっ……んっ……んっ……」

しっしっ

んっ  
んっ

「んちゅ……」

昔と同じ石鹸を使っているのか  
母さんからはあの時と同じ匂いがしてくる。  
なのに今の僕にはこの匂いが  
とても不快に感じられた……



「どうかしら？  
興奮してきたでしょ？」

「おばさんがリードしてあげるから  
このまま本番やつちやおっか♥」

フハッ

アッ

僕は一体何をしているんだろう。

頭の冷静な部分がそんな疑問を投げかけてくる。

実の母親と交わるなんて正気じゃない。

こんな気持ちの悪いこといまずぐやめるべきなんだ。  
なのに僕の中にある別の感情がそれを阻んでいる。



その感情とは嫉妬であり憎悪だった。  
僕を捨てたくせに見ず知らずの男には  
愛を振りまいていた母さんが  
許せなかったんだ。

「この上の穴に入れるのよ。  
落ち着いて  
ゆっくりでいいからね」

ピトッ

だから……  
これは復讐なんだ。



母さんの中に僕のモノが沈んでいく。  
初めて味わう女性の膣は  
生暖かくてヌメヌメしていた。

「んっ……上手よ。  
お兄さんのオチ○チン  
おばさんのま○こにぴったり  
フィットしてる」

「私達すごく相性が  
いいみたい♥」

ズ  
ズ  
ズ  
ズ

『親子だからだよ』  
そう打ち明けてしまいたい衝動を  
なんとか抑える。  
僕は黙って腰を振り始めた。



「あっ♥あんっ♥」

ま○こを突くたびに  
母さんからわざとらしい喘ぎ声が響く。  
それがとても気持ち悪い。

「いいわ♥  
イッちやう♥」

「んはあっ♥  
イクッ♥イクッ♥  
イッちやうううう♥」

ブッ

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

ブルン

でも気持ちとは裏腹に  
母さんのま○こは  
とても具合が良かった。  
情けなくも僕は  
数分と持たずに果ててしまった。

「すごい。いっぱい出たね♥  
おばさんでこんなに  
気持ちよくなってくれるなんて  
嬉しいわ♥」

「でも……おばさんまだ  
足りないな♥  
もっともつとお兄さんのチ○コで  
いじめてほしいな♥」

ボビッ

ドゾ  
ドゾ  
ドゾ

ハア

ハア

息子に中出しされたとも知らず  
母さんは延長をねだってくる。  
役者を目指していたはずなのに  
母さんの演技はあまりに露骨だった。

「っ……疲れたでしょう？  
今度はおばさんが動くね♡」

「それじゃあオチ○チン  
いただきます♡」

僕が何も言わないことに焦ったのか  
母さんは僕の上に跨り  
勝手に延長戦を始めた。



母さん主導のセックスは激しいものだった。  
まるで僕のセックスが  
ヌルいと言わんばかりに  
肉と肉をぶつけ合い  
乾いた破裂音を響かせる。

さっきのようなわざとらしい  
喘ぎ声は聞こえてこない。  
その代わりにねっとりとした  
息遣いが母さんから漏れ出ている。



どこかで僕はまだ信じていた。  
母さんは生活のために苦しみながら  
こういうことをしているんだって。  
でも……そうじゃないのかもしれない……

「イグウウウウウ!!」

僕の信頼を  
ぶち壊すかのように  
母さんは  
酷いイキ顔を晒した。

そこには母性など欠片もない。  
いま僕の前にいるのは  
性欲にまみれた  
一人の中年のメスだった。

なんて下品な女なんだろう……  
さつきまであった母さんへの怒りが  
失望と疲労へと変わっていった。



「ねえ、連絡先教えてくれる？」

「おばさんまたお兄さんに  
会いたいな♥」

行為が終わると母さんはすかさず  
連絡先を聞いてきた。  
僕を客として囲うつもりなのだろう。

ハア

ハア

ハア

疲れ果ててしまった僕は  
言われるがままに教えてしまった。  
最後まで真実を告げることが  
できなかった……

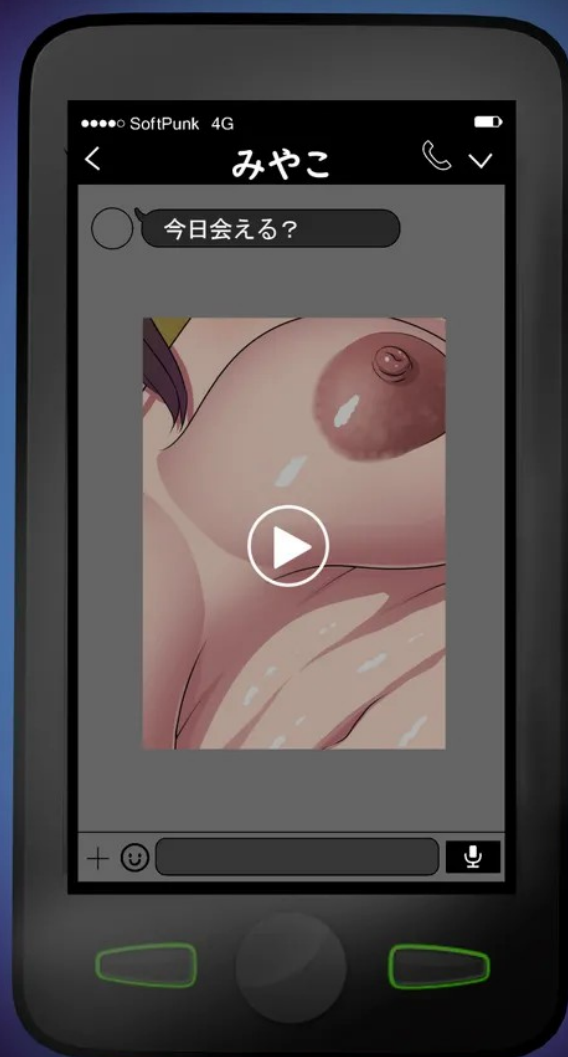


その日から僕は眠れない夜が続いた。  
少しでも気を抜けば  
母さんの感觸と匂いを思い出し  
吐きそうになった。

「僕は禁忌を犯してしまったんだ……」

今更ながらその事実が重くのしかかってくる。  
母さんを断罪するつもりだったのに  
僕が苦しめられるなんて皮肉な話だ。

なのにそんな僕の気も知らず  
母さんは営業のメッセージを送ってきた。



『見える？  
ゆうくん♡』

『おばさんのおま○こ  
ゆうくんのオチ○チンが欲しくて  
ヒクヒクしてるの♡』

くはあ

『ゆう』というのは僕が教えた偽名だ。  
本名に響きを似せたからもしかしたら  
気づくんじやないかと期待したけど  
そんな様子はまったくくない。



母さんは日銭を稼ぐことに必死なんだ。  
二回り近く年の離れた僕に  
情けを乞う姿はあまりに痛々しい。

『聞こえる？  
おばさんの中は  
もうぐちゃぐちゃよ♡』

『早く入れに来て♡  
もうおばさん我慢できないの♡』

これを他の何人もの男に  
やっているのだろうか？  
そう考えるとまた嫌悪感がこみ上げてくる。



僕が行かなければ代わりに  
他の男のモノが母さんの中に入ってしまう。  
僕の焦りに呼応するように鼓動が加速する。

『待つてるよゆうくん♡  
一緒に気持ちよくな  
りましょ♡』

僕が求めていた『母さん』はもういない。  
もう過去は切り捨てるべきなのに……。

なのに僕にはそれができなかった。  
葛藤を抱えながらも僕の足は  
あの寂れたアパートに向かっていった。



「あんっ♥  
どうしたの？  
今日はすごく積極的ね♥」

僕はアパートに着くなり  
母さんに抱きついた。  
あの時の感触がフラッシュバックし  
再び激しい吐き気に襲われる。

ぢゅっ

でも僕は止まらなかった。  
母さんを他の男なんか  
とられたくない。  
そんな幼稚な独占欲が  
嫌悪感を上回ったんだ。



「うっ……」

前戯もなしに母さんの中に  
イチモツをねじ込む。  
まだ濡れていないため母さんから  
苦悶の声が漏れる。

ぐぐぐ

でも母さんが文句を言うことはない。  
こんな扱いは日常茶飯事なのだろう。



もうすでに何人もの男が  
これと同じことをやっている。  
母さんにとっていまの僕は  
その中のひとりに過ぎないんだ。

「あっ♡あっ♡あっ♡  
あんっ♡」

「イクう♡  
イッちやうう♡」

ハッ  
ハッ

ズッ  
ズッ  
ズッ

ズッ  
ズッ  
ズッ

「イクウウウウウウ♡」

いや、もしかしたら僕は  
他の男たち以下の存在かもしれない。  
全然気持ちよさそうじゃない  
わざとらしい母さんの喘ぎ声に  
僕の焦りは大きくなっていく。



その焦燥感に急かされるように  
僕は母さんの中で果てた。  
それでもこの不快な気分は収まらない。

「すごかったわ♥  
おばさんゆうくんち○コの  
虜になっちゃった♥」

「ねえ、まだできるよね？  
もっとおばさんに欲望を  
ぶつけて欲しいなあ♥」

グ  
ボ  
ボツ

ハ  
ァ  
ハ  
ァ

ハ  
ァ  
ハ  
ァ

このセリフだって客の全員に言ってるんだ。  
思考がどんどん深みにはまっていく。  
その苛立ちをぶつけるように  
僕は再び抽挿を開始した。

僕は母さんのお尻が  
真っ赤になるほど  
激しく腰を打ち付ける。

このくらい乱暴な方が好きみたいで  
母さんの喘ぎ声から演技臭さが  
抜けていく。

でもそんなものは  
何の慰めにもならない。  
僕が見たいのは  
こんな普通の反応じゃない。



僕は母さんのお尻に  
指を突っ込んだ。  
ここならばみんなの知らない  
母さんが見れると思ったんだ。

「おほおほおほ♡」

「おっ♡おほっ♡  
おっ♡」

反応は上々だった。  
指を深く突っ込む度に  
母さんから聞いたこともない  
間抜けな声が漏れてくる。



「おほおほおほおほおっ  
イグうううううううう」❤️

ヴ  
ウ  
ウ

ボ  
レ  
ウ

ヴ  
ヴ  
ヴ

母さんはあつという間に絶頂した。  
僕の手で母さんを  
満足させられたという事実  
に少しだけ心が慰められる。



でもそんなものは幻想だった。

「もしかしてお尻の穴に興味があるの？」

「使いすぎてま○こよりはユルいけどよかったら使ってみる？」

母さんの体で汚れてないところなんてなかったんだ……



母さんのアナルは  
言われた通りユルかった。  
でも反応はま○こに入れたときより  
ずっとよかった。

「うほっ♡  
おおおおおお♡」



お客さんの中にアナルマニアの人がいて  
徹底的に開発されたのだと  
僕の気も知らないで嬉しそうに教えられた。

この体位も母さんから提案されたものだ。  
母さんは他の男にこうやってお尻を掘られ  
豚のように鳴いていたんだ……



密着した体から伝わってくる痙攣は  
かたてないほど母さんが  
感じていることを示している。  
僕のやり方じゃここまで出来なかった。  
それがまた一段と屈辱感を増幅した。

僕が射精に至る頃には  
母さんはイキ過ぎて気を失っていた。  
緩んだ尿道から濃い目のおしっこが  
漏れ出てくる。



こんな惨めな女なんて  
僕の母さんじゃない。  
そう思えば楽なのに……  
なのに汚れた姿を  
見せつけられるたびに  
僕の執着はより強くなっていった。

それ以来僕は毎日  
母さんのもとに通

何度も母さんと交わり  
好きな体位も感じる場所も  
徹底的に調べ尽くした。



中出しも何度もした。

避妊薬を飲んでるらしいので  
妊娠することはないのだろうけど  
きつと母さんの子宮は  
僕の匂いで染まっているはずだ。



そう自分に言い聞かせて  
心の平静を保った。  
でも……どれだけ目を逸らそうとも  
現実是不変ならない。

「いらつしゃい。  
また来てくれて嬉しいわ♡」

グイン

「今日も卑しい雌豚を  
しっかり舐けてください。  
ご主人さま♥」

「ふひひw  
ほんとにお前は  
どうしようもない女だなw」

フリフリ

「しかたねえ。  
可愛がつてやるから  
今日もいい声で鳴けよ」

「はいっ♥」

母さんはいまも他の男に抱かれている。  
僕がどれだけマーキングしようとも  
次の瞬間には他の男の匂いに  
塗り替えられているんだ。



それに気づいてしまったんだ。  
僕が呼び出されるのは一番最後。  
本当に他の客がいないときだけなんだと。

「おら鳴けええ！」

「さあさあさあさあ！」

ズン

ズン

バリ

バリ

ズン

「声が小さいぞ！  
やる気ないなら今すぐ  
やめてもいいんだぞ！」

「ぶひひひひひ！！  
ブヒブヒブヒ  
ブヒヒヒヒヒヒ！！」

僕はなめられてるんだ。  
いつでも来る便利な客として  
利用されてるだけなんだ。



一度自覚するともう駄目だった。  
僕はもう、この惨めな立場に  
耐えられなくなってしまった。

「んん……んん……」

「ふひひひ  
うれしよんしてやがるw  
もう完全に俺の家畜だなw」

「んん……♡」

「ブッブッ」

「んん」

「ハァハァ」

「ハァ」

「ビチャ」

「ビチャ」

「んん」

だから僕は最後の手段に  
出ることにしたんだ。  
それが僕たちの関係を  
終わらせてしまうと  
わかっていながら……



「きよっ……今日は  
変わったプレイを  
ご所望なのね……」

「うん……  
ちよこママのおっぱいが  
恋しくなっちゃ。  
自分の子だと思って  
慰めてよ」

「え……ええ」

僕は母さんに赤ちゃんプレイを要求した。  
何でも応じてくれる母さんが  
珍しく乗り気でないのを見て  
少しだけ心が慰められる。



母親を演じることに  
躊躇いを覚える程度には  
過去の選択を後ろめたく  
思っているんだ。

「よ……よしよし。  
いい子ね……」

「おっぱい  
おいしいでちゅか？」

「いっぱい飲んで  
大きくなるんでちゅよ」

でも当の本人が目の前に  
いることには気づいてくれない。  
たぶん一生気づかない。



だから僕は――

「下手な演技だね……。  
この程度の才能のために  
捨てられたんだと思うと  
悲しくなってくるよ  
……母さん」

「……………え？」

何を言われたのか理解できずに  
いや……理解したくなくて  
母さんの思考が停止する。  
その隙を突いて僕は母さんを組み敷いた。



「待って！  
こんなのだめっ！  
お願いだからやめて!!」

ぐっ

「いまさらなに言ってるのさ。  
最初に誘ってきたのは母さんでしょ？  
僕たちもう何度も繋がったじゃないか」

「違うの！  
気づかなかったの！  
だって私が知ってるのは  
子供の頃の——」

「言い訳するな!!」



「母さんは実の息子とやったんだ！  
僕を生んだこの穴で  
何度も僕の子○コを咥えたんだ!!」

「やめて!!  
違う!違うの!!」

「違うよ!」  
僕に女を教えてくれたのは母さんだ!  
何があつたってこの事実は消えないんだ!!」

「いやあああ!  
抜いてえええええええ!!」

ズググ





「ほう！  
ここが気持ちいいんでしょう？」

「あああ♡♡  
いや♡♡ああああ♡♡」

「母さんの体のことなら  
なんでも知ってるよ！  
ほらっ、もっと鳴いて見せてよ！」

「やめっ——  
イグッ——イグイグイグ♡  
イグウウウウウウ♡」

僕は今までの鬱屈をぶつけるように  
何度も母さんを抱いた。  
この先ずっと母さんの記憶に  
残り続けるよう何度も何度も……

終わってみれば  
僕はただ母さんを泣かせただけだった。

「ごめんなさい……  
私が間違ってたの……」

「でもどうしようもなかった……  
いまさらあなたに合わせる顔なんて  
なかったの……」

たぶんもつとマシなやり方がいっぱいあった。  
親子に戻る未来もあったはずだ。  
でもそれが出来なかったのは  
僕が母さんに似て弱い人間だったからなんだろう。



「だったら母親面なんてしないでよ!!  
僕たちはもう赤の他人なんだ!!」

「他のお客さんと同じように  
黙って体売ればいいだろ!!!」

僕は甘えたかったんだと思う。  
駄々をこねた僕を叱ってほしかった。  
そうして最後は優しく抱きしめてほしかった。

『馬鹿なこと言わないで。  
あなたはいつでも私の子よ』って。



でも母さんは言ってくれなかった。

「そうね……  
わかったわ」

たったの二言。  
それが母さんが僕にかけてくれた  
最後の言葉になった。



そこからのセックスは  
吐き気をもよおすほど  
濃厚だった。

母さんは僕の唇を塞ぎ  
ナメクジのように密着して  
ずっと離さない。

およそ実の息子に  
するようなものじゃない  
情欲を掻き立てるための  
下品なキスだ。



母さんはもう  
僕を息子だと  
見ていなかった。

僕はいま、一人の客として  
性欲を処理されているんだ。  
少しも艶を含んでいない息遣いから  
それが伝わってくる。

こんなはずじゃなかった。  
僕はただ母さんに受け入れて  
もらいたかったのに……



そうして僕は  
あっけなく射精させられた。  
それでも母さんは  
キスをやめくれない。

気持ち悪い……  
麻痺していたはずの嫌悪感が  
猛烈な吐き気とともに蘇ってくる。

耐えられなくなった僕は  
母さんを振り払い  
シャワーを浴びることもせず  
その場を立ち去った。



それ以来母さんから連絡は来ていない。  
僕の方からも連絡はしていない。

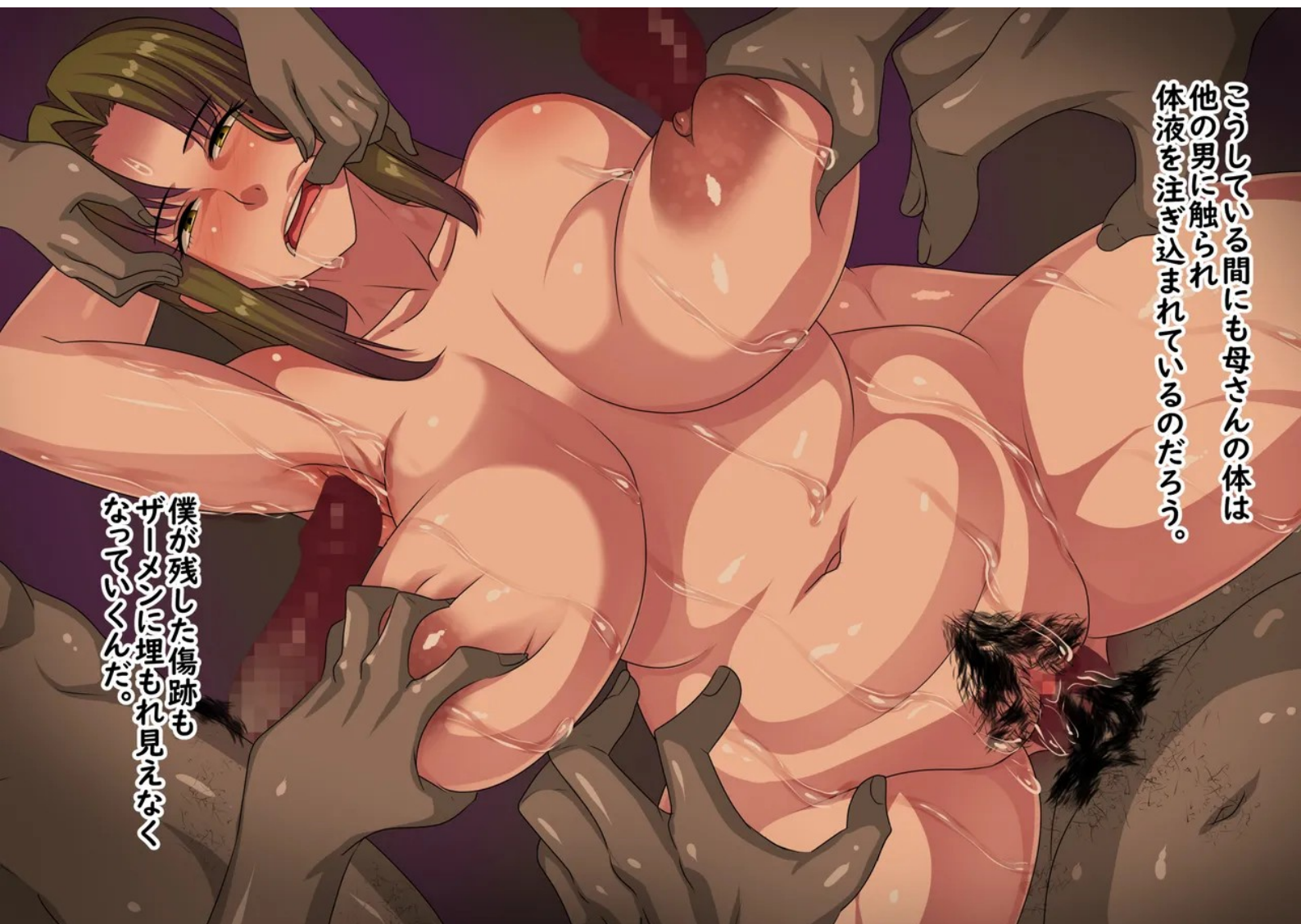
お金のない彼女はあの場所から出ることはできない。  
だから会おうと思えばいつでも会えるんだと思う。  
でも僕にはもう足を運ぶ勇氣はなかった。

101

母さんは僕を拒絶したんだ。  
もしかしたらそれは優しくさだったのかもしれないけど  
結果は何も変わらない。  
僕と母さんの道は今度こそ完全に別れてしまったんだ。

こうしている間にも母さんの体は  
他の男に触られ  
体液を注ぎ込まれているのだろう。

僕が残した傷跡も  
ザーメンに埋もれ見えなく  
なっていくんだ。



その光景を想像しながら  
僕は自らを慰めた。

べちゃ

おわり

